南宋天台における竹庵可観の役割

大松博典

一

中国天台宗の研究状況を振り返ると、四明知礼（九六〇―一〇二八）以後の動向が如何なる状態であつたかを論ずることは、現在までほとんど成されなかつたようである。とりわけ、南宋（一一二七―一二七八）については、知礼をうけていわゆる山家派の四明三家とされる人々が僅かに活躍した、と指摘される程度である。

かつて安藤俊雄博士は、宋代以後の天台実相論の発展を究明するため、一念三千論を観点として、古来とかく軽視されていた知礼没後の山家教学の展開過程を系統的に究明され、学会に多大の功績を残された。が、それは飽くまで一念三千論を中心とした論であり、今日では別の観点からの論究も必要ではないかと思う。換言すれば、ひとつの思想を柱に人物を配し全体を体系的に縦に眺めることと共に、人物個々の「人と思想」を横に眺めることも必要であろう。

私は主に後者の観点から南宋天台に注目しているのであるが、一昨年の晦岩法照（一一八五―一二七三）、昨年の北峰宗印（一一四八―一二一三）に続き、今回は竹庵可観（一〇九二―一一八二）を取り挙げその「人と思想」について若干の考察を加えてみたい。

二

可観の伝記は『釈門正統』七・『仏祖統紀』十五に述べられる。ここでこの二書を比較対照し細かく検討する余裕はないが、興味深い点だけを抽出すると、可観は、慧覚斉玉のもとで『十不二門指要鈔』を読み因果不二門に註する文に至つて、語言文字の空しさを歎じたと云う。すなわち、「読二指要鈔一至二若不レ謂レ実鉄状非レ苦変易非レ遷歎日語言文字皆糠粃耳」（続蔵一三〇・四三八d）と。また、「松風山月自与作二無尽衣鉢一何言二薺塩淡薄一耶」（同）といい、丞相魏杞に対して「胸中一寸灰已冷頭上千茎雪未レ消老歩只宜二平地去一不レ知何事又登レ高」（同）といったと云う。いずれも、可観が文字のみを事とする学僧ではなかつたことが窺えよう。さらに、『仏祖

統紀』には「杲大慧自二径山一行化来二訪当湖一対語終レ日敬之日二教海老竜一也」（続蔵一三一・一〇〇a）とあり、大慧宗杲（一〇八九―一一六三）との関係も伝えられる。（『釈門正統』にこの件はない）

以上から推するに、可観の行状には当時隆盛の禅宗が深くかかわつており、今後、禅宗との関連を無視して可観伝を把握することは難しいと云えよう。

三

可観の現存する著作は『山家義苑』二巻『竹菴艸録』一巻である。これらの著作を通じ思想的な特徴面を検討すると、以下のようになるであろうか。まず天台宗内でみれば湛然教学への著しい傾倒が目をひく。すなわち、『金錍論』に対して十義を設け詳述するのはもちろんのこと「荊谿明文明如二日月一」（続蔵一〇一・一八二d）とか、「天台大師摩訶止観指二的妙境一出レ自二於此一荊溪点示学者通知」（同・一九四a）とか述べる。「荊谿明文」「荊溪点示」の語はこの他にも数ケ所散見できる。これらほんの二例からも明らかなように、全編を通じて湛然教学に対しては深い理解を示していたと云えよう。次に知礼に対しては、すでに安藤博士御指摘のように、別理随縁説には反対しているものの三千常住・蛣蜣六即・寂光有相説を古今の絶唱と讃じているのである。ついでに山外派とされた仁岳に対しては、「弁岳師三千書」の項に見られるように痛烈な批判を展開している。がしかし、その批判は単に仁岳のみを指したと受けとれないところもある。すなわち、「然此喩非二独岳師不レ暁只四明宗下多云レ難レ会」（同・一八四b）といい、また「詳二夫岳師見解一拆二円三諦一分二対有無一初学一往易レ暁」（同c）というところを見れば、仁岳のみを批判したとも云い切れない。もちろん、仁岳を支持し知礼を批判の対象とした所は皆無であるが。とりあえず、知礼・仁岳に対する処し方について如上の点が留意される。

さらに天台宗外に目を移すと、当時の仏教事情を反映してか禅宗に関係する記事が多い。その他、浄土や華厳に関する記事もある。順に眺めて行くと、禅宗については厳しい姿勢を貫いていることがわかる。とくに祖統説に関しては全てを否定し、天台の嗣承の正しいことを説く。また、『六祖壇経』で自心の西方心こそが真の西方往生であると説くが、これは一笑に付すべきものであり、禅宗でいう性を語る理は徧であり禅病以外の何ものでもない、と仲々手きびしい。しかし一方、「畢竟諸法未二嘗迷悟一不レ知以レ何為レ迷為レ悟」（同・一八二b）とか「以レ何為レ体以レ何為レ宗以レ何為レ用意在二於行一」（同・一九九a）という言葉をみれば、もはや知解の範囲を越えておりそこに禅の要素を看取できるように思う。浄土については極だつた否定は見られず、むしろ急救法としての意義を認めている。華厳については、「早年竊読二唐朝賢首宗教清

涼国師華厳新疏二」（同・一九六a）とあるように、相当の関心があつたことが窺えよう。そして法蔵については、枝葉末節に拘泥して根本を推らず、為に経の所説に随つて五教を立てた、と批判的である。澄観については、法蔵の五教をもつて智顗の化法四教を対会したはいいが、華天両宗の立教の違いを考慮に入れていない、と判じた。かように表面上はかなり対立的であるが、「記得游学初年先欲レ討二尋化法教名一於二此三蔵一怏怏不レ決伏読下清涼華厳大疏経前義門対二辨立教一照中会宗教上方暁」（同・一九六c）というように、澄観の疏によつて得た華厳を含めた各宗への理解もかなりの分量にのぼるのではあるまいか。

四

南宋代の天台宗の動向については、これまで実相論の展開を解明するという過程において取り挙げられ論じられてきた。が、個々の人物の「人と思想」についての検討は、なお不充分であると思う。可観は南宋の初めに活躍した高僧であり、その行状と思想について若干の考察を加えてみたが、まとめると以下のようになろう。

行状の面では、禅宗との交渉を指摘できる。もちろん、伝記類にありがちな意図的表現は考慮に入れなければならない。が可観の場合、今に伝わらないが『楞厳経』『金剛経』に関する註釈書が多いということ、現存する著作の思想面からも禅的な部分が類推できるということは特異であり、今後禅宗との関係を更に積極的に解明する必要があろう。

思想の面では、現存する『山家義菀』『竹菴艸録』いずれも可観の思想を如実に伝えており、便宜上天台宗内・宗外に分けてその特徴を集約してみると、宗内では湛然に対する傾倒が全般に渡つて注意される。つまり、論義の展開過程において、その拠り所として湛然の著作を引き合いに出し証権としている。それも単に証拠としてだけの意味合いではなく、帰依尊崇し大いなる権威を認めている。それは、全体的にみれば支持者であるが、一部にはその説に反対した所も見られる知礼への対応の仕方と比較することによつて、より明瞭になつてくる。次に宗外では特に華厳や禅に対する理解が目立つ。それは何も可観だけに限つたことではない、中国仏教全体に見られる悪しきセクト主義に堕さない傾向の一部とも考えられる。しかし、可観の場合、その影響は顕著であり、澄観の著作に裨益されたと吐露しているほどである。以上、雑駁な論究であるが、とかく山家派の流れの中にだけ閉じ込められがちな可観の位置も、南宋初期の天台では重要な位置にあり、後の天台を存続せしめる重大な役割を果たしたと云えよう。そこには、諸宗に対する深い理解が根底にあり、とくに唐代の教学について相当の理解があつたように思われる。

〔細註省略〕

（専大北上高校教諭）